銀行員のための

経営科学研究所
主任研究員　井坂　康志

これまで社会科学の領域は、特に経済学において物理学をお手本とした分析枠組みが築かれてきた。なかでも、近代経済学といわれる分野では、精密なモデルの構築と数式による合理性の追求が同時並行でなされ、一大伽藍を形成してきた。

むろん、戦後の経済学の発展は、ある面マルクス経済学との対抗関係のなかでなされた部分もあり、いわゆるモダンの手法としての合理主義的なアプローチが仇敵への過剰反応として表出したものと見ることもあながち的外れとはいえないと思う。

実際、近代経済学の果たした役割はきわめて大きなものがあった。何よりも科学としての経済学を確立し、かつ種々の経済現象の解明に多大な貢献がなされた。特に20世紀において生み出された経済学の成果が人類の知的遺産に強力な一角を占めたものと考えてよい。

だが、近年の経済現象を見ると、特にグローバリズムや情報化の流れのなかで、静態的な均衡理論に疑問の声が聞かれるようになっている。このことは、企業や人材、産業地域、ネットワークや技術革新といったこれまでのモデルで十分に扱われなかった要素が、きわめて全体状況に多大な影響を与えうる変数として立ち現れたことによる。

そこで、今月は銀行員の方々が現実の経済社会を捉える際のものの考え方について好材料を提供する本をご紹介したい。

最初が、**石倉洋子他『日本の産業クラスター戦略』（有斐閣、2003年）**である。従来型の地域振興策を批判的に捉え、クラスターという比較的新しい概念を方法的・実証的に基礎づけるものである。日本の長期停滞の打開に必要とされる制度設計が本書の中心課題である。具体的には、都市や地域の場において、異質な主体同士を多様に交流させることで新たな価値を創出する仕組み作りである。広域TAMA等の事例分析は、日本の強みと弱みを認識するうえで好材料を提供するものといえる。

域内ネットワークでは、ともすれば「協調・協同」的側面が過剰に強調される傾向がある。しかし、現実には熾烈な競争関係が恒常的に発生しており、競争と協調は集積内で両輪の原動力として機能し、きわめてシビアな網の目状の世界を創造する。

さらに、多様性の確保が場に生命を吹き込む。場を構成する主体にはある程度の同質性が必要だが、一方で異端者に対する寛容さも不可欠である。なぜなら彼等こそが常識にとらわれない革新の主体となり得るためだ。たとえばゲイやボヘミアン、外国人の人口割合はハイテク産業が成功する都市の社会的指標としても機能するという。マイノリティ（少数者）を許容する風土なくして多様性の確保は困難なのである。

クラスターの構成要素は企業、大学、自治体、国等多岐にわたり、「協調」と「競争」の関係を随時組み換えながら成長する。多様性の度合いが高まるほどに、相互信頼などのソーシャル・キャピタルが基盤としての重要性を増す。今後の方向性についても具体的かつ有用な思考枠組みを提供してくれる。

次に、上記のソーシャル・キャピタルを包括的に理解するのによい本が**神野直彦・澤井安勇編著『ソーシャルガバナンス』（東洋経済新報社、2004年）**である。

時代転換の現代に必要とされる社会原理とは何か。社会連帯の中心基軸をどこに見出すべきか。ここで参考になるのが、ソーシャル・エコノミーという概念である。利潤よりも社会的目的によって存在する組織体であり、運営にあたっては政府から自立していることが前提となる。この種の組織が全世界で大きく活躍の場を広げつつある。

ソーシャル・エコノミーを支える基盤をパトナムは、「ソーシャル・キャピタル」と呼んだ。これは、フランシス・フクヤマが「信頼」と呼ぶ社会の無形基盤であり、事業運営を可能にする法・政治・慣習などの安定的仕組みである。この「古くて新しい」システムこそがここでの一貫した分析対象といえる。

かつて日本には地域共同体が高度に発達していた。だが、高度成長期を経て、地域コミュニティは多くの地域で分断された。地域から都市への労働移入はピークを迎え、大きな社会変動をもたらした。これにともない共同体意識は低下していった。現在問題視される地域産業の衰退は詰まるところ、この問題と同根である。

つまり、問題の根は普遍的な人間社会の成立条件に関わる。社会変動のなかでは政治制度が変わる。経済が変わる。だが、変わらないものもある。それは人間である。社会における人間の研究こそが、変動期における社会原理の分析に不可欠である。秩序を維持するのも人間なら新たな秩序を作り出すのも人間であるためだ。

次に、社会理論に一石を投じた「スモールワールド」に関わる本を挙げたい。**マーク・ブキャナン／阪本芳久訳『複雑な世界、単純な法則』（草思社、2005年）**がおもしろい。

よく旅先で会った人がよく聞いてみたら同郷であったり、共通の知人がいたりするなどは、決して珍しいこととはいえない。過去には単なる偶然とされていたものに、ネットワークの構造や形態からアプローチを試みるのが、「小さな世界（スモールワールド）」である。近年、このようなネットワーク科学が注目されはじめている。ネットワーク分析の最前線と全体像を知るにはまさにぴったりだ。

言葉の定義からいっても、ネットワーク構造が理解されるには、「つながり」それ自体を研究対象とせざるをえなくなる。つまり、一個の部品だけ取り出しても意味はない。全体の「つながり」としてどう機能するかを観察するしかない。そうなると、形態やパターン、リズムに着目しない限り、働きはいつまでたってもわからない。

むろん、時代の要請もある。やはりインターネットの登場が大きいのだろうと思う。電脳といわれるが、脳のメカニズムに似ているのだ。ウェブはスモールワールドの典型例である。現在さまざまな論者により批判・検討が加えられ、進化が促されてもいる。

ここでは歴史が決定的に重要になる。ネットワークの形成は分水嶺における水の流れに似ている。ほんのちょっとした作為で進路が変わる可能性がある。かつてある哲学者が、「歴史における小指の働き」といったことがある。どんなに押しても開くことなかった扉でも、機が合えばたった一人の小指でも扉は開いてしまう。まさに乾坤一擲の世界であり、世の革命や戦争、恐慌などが代表例といえるであろう。総合的な知的領域として、これからが楽しみである。

ここまで紹介したものは、いずれも対象への視点や枠組みを広くとらねば見えてこないものばかりである。社会科学のそれぞれのアプローチも、経済社会という目的に従属する道具に過ぎない。分析対象の変化は必然的に道具の変化をも促す。単に現象のみを見るだけでは、肝心の構造的な核心部分を見過ごすこととなる。

ここで挙げた本はいずれも領域横断的な分析手法を用い、多面的な問題を統一的な意識によって捉えようとしている点で共通している。難点は若干理論に傾いていることであるが、現実に起きている大きな時代変化を考える上で知的な刺激を与えてくれることは確実である。これからの地域経済や銀行経営を考える際の基本的な視座を提供してくれる本でもある。